

社会人基礎力の視点から見たゼミ教育の効果に関する一考察

白土由佳・寺嶋正尚

要旨

本論文では、社会人基礎力の視点からゼミナール教育の効果について考察した。3年次向け学部ゼミナールにて、対外発表を目指したグループ研究活動に取り組む学生に対して2回にわたって自己分析アンケートを実施した。アンケート調査を通じて、中期的グループ研究活動および学際的対外発表という機会は、課題発見力や協働力の向上、普段の授業からは得難い新たな視点をもたらすことが示された。また、グループ研究のようなあらかじめ答えが用意されていない実学教育の場は、結果的に様々な力が向上するセレンディピティを前提とした成長の機会として捉える重要性があることが示唆された。

キーワード：ゼミナール、ゼミナール教育、社会人基礎力、実学教育、自己分析

1. はじめに

大学教育におけるゼミナールとはどのようなものだろうか。大学が学生に提供する教育体系においてそれはどのように位置付けられ、そしてどのような教育効果が期待されるのだろうか。近年、実学教育を喧伝する大学は少なくないが、その理念の実現に際し、ゼミナール教育はどのような貢献を求められているのだろうか⁽¹⁾。

神奈川大学のホームページを見ると⁽²⁾、「ゼミナールと卒業研究について」と称する項目において、「学問の奥深さに触れ、究めたいテーマを得ることが大学で学ぶ意義であり、よろこびです。『ゼミ・卒業研究の神大』といわれるように、双方向型の少人数教育を重視し実践することは、神奈川大学の伝統そのもの。文系学部では『ゼミナール・演習・専門研究』、理工系学部では『卒業研究・制作』として、一人ひとりが学修の探究と集大成に取り組めます。」とある。学生の視点に立ち、「学問の楽しさ」「学ぶことの喜び」に触れている。また続いて「自分で決めたテーマについて文献や資料を調べゼミ仲間や指導教員と討論を重ねながら、論文にまとめていきます。ゼミ合宿などでは、仲間との交流を通して、豊かな人間性を育むことができます。」とある。学問の習得の枠を超え、ゼミ仲間や指導教員との交流を通じて、人間性を育むことの可能性を記している。ゼミナールの価値を多面的に捉え、その効果に関しては、様々な解釈の余地を残したものとなっている。

今試みに「ゼミナール (Seminar)」なる用語を広辞苑で引くと、「①大学の教育方法の1つ。教員の指導の下に少数の学生が集まって特定の分野・テーマについて文献購読や発表・討論などを行うもの。演習。ゼミ。セミナー、②一般に、講習会」とある⁽³⁾。本稿で扱うゼミナールは、前者の定義が該当するが、同定義を見ても、明確な定義は付されていない。

本稿はこのゼミナールに焦点をあて、その教育効果について論じるものである。その際、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」の視点を用いた。ゼミナールの目的は、必ずしも社会人基礎力の涵養を目

的としたものではないとの誹りを受ける可能性がある。学問的な内容そのものの習得を目指した個別指導に近いもので、将来研究者として身を立てるための学びの場に過ぎない、修士課程、博士課程における研究室に近いゼミナールもあることだろう。ゼミナール教育の効果を論じるうえで、この社会人基礎力なる指標を用いることの是非は、今後丁寧に議論される必要があるが、しかし次章において考察するように、大学における学びを社会人基礎力に結び付けて論じる先行研究が少なからず存在するのも事実である。本稿もこうした一連の研究の流れに沿い、限界を感じながらも、既に社会的認知を得たであろう指標、社会人基礎力の枠組みを用いて、ゼミナールひいては大学教育の効果を論じるものとする。具体的には、学生による自己分析アンケートを通じて、学会発表を目標に定めたゼミナールという場が得意とする実学教育の方向性、および学会発表という大学間の連携を通じた学際的な学生同士の相互刺激の価値を検討する。

2. 先行研究

本稿は、大学にゼミナール教育の効果について論じるものである。実に多くの先行研究があり、枚挙に暇がないが、以下主要なもの、最近のものを中心に、(1)ゼミナール教育に関する先行研究、(2)社会人基礎力に関する先行研究、の2つに大別し、それぞれ考察する。またそのうえで、先行研究に比した際の、本論文の付加価値すなわち学術的意義について論じるものとする。

(1) ゼミナール教育に関する先行研究

先ず大学におけるゼミナール教育全般について論じたものとしては、西野(2016)がある。同論文は博士論文であり、わが国におけるゼミナール教育の発展過程及び構造について考察したものだが、審査委員の主査及び副査教員による要旨では、「戦前期日本のゼミナール教育は、『学生による報告と討論及び教員と学生の対話を通じて、専門性の向上及び、全人的教育の実現を目指すもの』であった。戦後においては、より一般的に拡大し、ゼミナール教育は、『学生—教員間および学生—学生間の緊密な対話によって知識・技能・態度を総合的に育成することを目指す少人数教育』と再定義されることが明らかになった。」としている。ゼミナール教育の歴史的な変遷について、その背景要因等を踏まえた上で考察する貴重な論文である。

ゼミナール教育に関するケーススタディとしては、先ず初年次ゼミや基礎ゼミ(主として1~2年次に配当されるゼミナール)に関するものとして、後藤他(1999)があげられる。同論文は、札幌学院大学・社会情報学部の1年次配当科目である「社会情報学基礎ゼミナール」を題材に、ゼミナールのあり方及び指導者の役割を考察したものである。実際にゼミナールを担当した5名の教員の指導実績が詳細にわたって記され、その効果や課題等について総括している。同じく井上(2004)も、札幌学院大学の「基礎ゼミナール」に関し、学生の学びの状況や実習指導員の役割等について定性的に論じている。

小林他(2002)は、文教大学の「基礎ゼミナール」に関し、その内容を考察した後、学生向けアンケート調査結果を記し、ゼミナール教育の効果について考察している。「友達ができた」「文献検索の仕方など図書館の使い方が理解できた」「講義の受け方が理解できた」等の項目が高評価となっている。また同論文では、同ゼミナールを担当した各教員の取り組み状況を詳細にわたって記述している。

篠原他(2023)は、北陸大学における前期1年次ゼミナールを取り上げ、同ゼミナールを受講することで、学生にどのような学習態度の変容が生じたか、アンケート調査をもとに分析したものである。斎藤他(2023)も同様に北陸大学における専門教育ゼミナールを対象とし、主体的な学びによる態度変容を論じている。篠原他(2023)同様、学生向けアンケートを行い、学習意欲の変化に関する各質問項目をベースとした探索的因子分析を行っている。「授業に臨む姿勢や授業に対する態度」「不測の事態や結

果に対する自己調整力」「自己評価に関する項目」の3つの因子を抽出している。

橋本（2024）は、大阪公立大学の1年次配当科目である「初年次ゼミナール」を題材に、その目的と到達目標の達成状況について、定量的に分析したものである。受講者向けアンケート調査を行い、初年次ゼミナールの重要な目的の1つである「多様な視点への気づき」について、「学生同士の議論や学び合い」「履修学生の学部・学域の多様性」それぞれとの関連性を検証している。

また向居（2012）は、地方私立大学1, 2年次の学生を対象に、ゼミナール教育の効果に関し、批判的思考スキルの育成の視点から論じたものである。学生を「批判的思考育成群」「批判的思考統制群」の2グループに大別し、ゼミナール教育の授業前及び授業後において、「論理的思考への自覚」「探求心」「客観性」「証拠の重視」なる項目がどのように変化したか分析している。

次に、主として3, 4年次を対象とした専門ゼミに関する考察としては、伏木田他（2011）がある。国・私立大学13大学を対象にアンケート調査を行い、学習者要因（受講動機、学習意欲）、学習環境の客観的側面（活動、教員による指導）、学習環境の主観的側面（教員に対する評価、共同体意識）、学習成果（汎用的技能の成長実感、充実度）の関係を検証している。同じく伏木田他（2014）は、ゼミナールの授業構成が、学生の汎用的技能に関する成長実感にどのような影響を与えたか分析したものである。都内に本部が所在する大学等のゼミナールの受講生を対象としたアンケート調査結果をベースとしている。伏木田他（2012）は上記2本の論文とは異なり、学生による授業評価コメントをもとに、テキスト分析を行ったものである。形態素解析による類出後の抽出、クラスター分析を行っている。なお同論文の分析手法は、今回執筆した本論文におけるものと同様である。本論文は、伏木田他（2012）と同様の枠組みを用いて、それを社会人基礎力との関係性から論じたものに他ならない。

次にアクティブラーニングの視点から論じたものとしては、一ノ宮（2016）がある。専修大学経営学部・一ノ宮ゼミナールのケーススタディであり、実際のゼミでの教育の様子が、事細かに記述されている。また森本（2024）は、同じく専修大学経営学部のゼミに関するものだが、同論文自ら、過去14年間にわたって行ってきた「教育に関する実践報告書」と位置付け、実際のゼミナール教育の様子を詳細にわたって描いている。いずれもゼミナール教育の現場を伺うことが出来る大変貴重なものと評価出来る。

(2) 社会人基礎力に関する先行研究

次に社会人基礎力に関する先行研究について整理する。

社会人基礎力とは、経済産業省が2006年に提唱したもので、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」である。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成される（表1）。同省はその後、2017年に開催した「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」における検討をもとに、同社会人基礎力を、『これまで以上に長くなる個人の企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力』とし、「人生100年時代の社会人基礎力」と新たに定義した。「社会人基礎力の3つの能力／12の能力要素を内容としつつ、能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要と位置づけられます。」としている⁽⁴⁾。

経済産業省（2010）は、この社会人基礎力に関し、企業人事採用担当者、大学生（日本人学生及び外国人留学生）に対するアンケート調査を行い、「企業が『学生に求める能力要素』と、学生が『企業で求められていると考える能力要素』には大きな差異が見られる。」としている。さらに「企業が学生に対し、『主体性』『粘り強さ』『コミュニケーション能力』といった『社会人基礎力』に類する内面的な能力要素の不足を感じている一方、学生はそれらの能力要素への意識は低く、『自分はずでに身につけ

表1 社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素

<p>(1) 前に踏み出す力（アクション）：一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体性 ・働きかけ力 ・実行力 <p>(2) 考え抜く力（シンキング）：疑問を持ち、考え抜く力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題発見力 ・計画力 ・創造力 <p>(3) チームで働く力（チームワーク）：多様な人々とともに、目標に向けて協力する力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発信力 ・傾聴力 ・柔軟性 ・状況把握力 ・規律性 ・ストレスコントロール力

（資料）経済産業省

ている』と考える傾向がみられる。」「学生は『語学力』『業界に関する専門知識』『簿記』『PCスキル』等の不足感を感じている一方、企業側はそれらの能力要素に関し不足感を感じていない。」「企業・学生ともに『社会人基礎力』3つの能力の中では、『前に踏み出す力』、12の能力要素の中では、『実行力』を重視』としている。

この社会人基礎力に関する先行研究としては、小磯（2012）がある。弘前大学における参加型授業である「社会と私——コミュニケーション力」について考察している。授業を担当する教員の立場から、受講した学生を観察し、学生の社会人基礎力なかでも「主体性」「働きかけ力」「柔軟性」「問題発見能力」「発信力」の向上が感じられたとした。

青木他（2012）は、キャンプ体験が、大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす影響について考察したものである。キャンプ体験者に対し、事前（実習初日）、事後（実習最終日）、1ヶ月後の3回にわたり、自由記述方式のアンケート調査を行った。その結果、キャンプ体験は、前に踏み出す力（アクション）の「主体性」と「実行力」、考え抜く力（シンキング）の「計画力」と「創造力」、チームで働く力（チームワーク）の「発信力」、「傾聴力」「状況把握力」などに対し、教育効果があると結論付けた。

清水他（2013）は、関西学院の卒業生を対象に、アンケート調査を行ったものである。「大学生活における取り組み」「大学生活での有用性」「仕事に必要な力とその獲得」「現在の仕事で発揮できていること」に関して、社会人基礎力の視点から質問している。

近藤（2014）は、筆者が所属する千葉商科大学の学生を対象に、①「社会人基礎力」指標の認知度、②回答者が最も重要と思う基礎力、③学生が最も不足していると思われる基礎力、等について尋ねている。サンプル数が28件と少ない為、参考資料としての域を脱しないが、②及び③に関しては、「主体性」と答えるものが最も多くなった。そしてこれら社会人基礎力を要請するために、「アクティブ・ラーニングの割合を増やす」「教員に対する啓発的活動を行う」の2点を提言している。

松尾（2015）は、インターンシップと社会人基礎力の関係について考察したものである。インターンシップに参加した愛知淑徳大学の学生83名を対象にアンケート調査を行っている。インターンシップに参加することで特に「主体性」が身に付いた、とする回答が目立った。またインターンシップ後に最も身に付けたい力としては、「発信力」「主体性」の順に多くなった。

(3) 本論文の学術的意義

本論文は、ゼミナールの教育効果について、社会人基礎力の視点から分析するものである。ゼミナールの教育効果について分析した論文は数多く存在するが、それを社会人基礎力の視点から考察したものはない。また大学教育を社会人基礎力の視点から考察するものも少なからず存在するが、同様にそれを用いて、ゼミナール教育を論じたものはない。本論文は、多くの先行研究が用いる社会人基礎力なる指標を援用し、ゼミナール教育の効果について論じるものであるため、そうした先行研究の結果との比較考察が出来る点に、まずは学術的意義があると考ええる。

またそもそも学生の本分は「学業を修めること」である。その学業の集大成、すなわち研究成果の発表の場として最高峰に位置付けられるのは学会発表であろう。学会発表にゼミ生全員を参加させ、そのイベントを通じた教育効果を考察する論文も存在しない。

また分析手法に関しても、前述したように、先行研究は学生向けアンケート調査をもとに定量的アプローチに基づくものが多いが、本論文は、自由記述回答をもとに分析したもので、より学生の生の声を忠実に表した点も特徴である。こうした点にも本論文の意義があると考ええる。

3. 研究対象

本研究では、2024年度の秋学期を通じて、寺嶋ゼミナール（神奈川大学経済学部）および白土ゼミナール（文教大学情報学部）に参加する3年生を対象に、社会人基礎力の観点からゼミナール教育の効果を検討する。

表2 文教大学情報学部白土ゼミナールの授業計画（2024年度秋学期）

週	内容
1	グループ分け、これまでの学会発表資料の読み合わせ
2	先行研究調査①
3	研究テーマの検討
4	先行研究調査②
5	調査の設計
6	調査設計の報告
7	発表用スライドの作成開始
8	調査の実施①
9	調査の実施②
10	データの分析①
11	データの分析②
12	データの分析③
13	4年生の卒業研究中間報告会
14	発表練習
	寺嶋・白土合同ゼミナール（文教大学湘南キャンパスにて）
	余暇ソーリズム学会学生教育研究会での発表（早稲田大学早稲田キャンパスにて）
15	学会発表の振り返り

表3 神奈川大学経済学部寺嶋ゼミナールの授業計画（2024年度後学期）

週	内容
1	別プロジェクト（神奈川経済同友会主催の産学チャレンジプログラム）
2	別プロジェクト（神奈川経済同友会主催の産学チャレンジプログラム）
3	別プロジェクト（神奈川経済同友会主催の産学チャレンジプログラム）
4	別プロジェクト（神奈川経済同友会主催の産学チャレンジプログラム）
5	グループ分け及び先行研究調査1
6	先行研究調査2
7	研究テーマの検討
8	研究テーマの決定
9	仮説の設定
10	実際の調査（文献調査、アンケート調査、インタビュー調査等）1
11	実際の調査（文献調査、アンケート調査、インタビュー調査等）2
12	実際の調査（文献調査、アンケート調査、インタビュー調査等）3
13	発表資料の作成
14	発表練習
	寺嶋・白土合同ゼミナール（文教大学湘南キャンパスにて）
	余暇ツーリズム学会学生教育研究部会での発表（早稲田大学早稲田キャンパスにて）

分析対象とする2つのゼミナールの教育内容を紹介しよう。両ゼミナールとも、毎年1月初旬に開催される余暇ツーリズム学会の学生教育研究部会に参加し、研究発表に取り組むことを目指す。学生教育研究部会では、学生による研究の向上を目的として、主に学部3年生を対象として複数の大学が参加する発表会を開催している。2024年度の部会には7大学9ゼミから22チーム、合計146人が参加した、大規模な取り組みである⁵⁾。参加する学生の所属は商学部、経済学部、観光学部、情報学部と多岐に渡り、質疑応答も全て学生間で行われることから、普段の授業では得ることが難しい対外的な発表、学際的な学びの場として機能している。

白土ゼミナールの2024年度秋学期授業計画を表2に示す。白土ゼミナールでは、3年次春学期の半年間を通じて社会調査に関する量的・質的手法の習得を目指し、秋学期の半年間にそれらの手法の応用を目指してグループ研究活動に取り組む。第1週にグループ分けを行い、過去資料を参照して半年間をかけて取り組むグループ研究活動について理解する。その後、一般的な研究活動同様の手順を通じて、先行研究の調査、テーマの検討、調査設計と実施、分析と発表資料作成に取り組む。

寺嶋ゼミナールの2024年度後学期の授業計画を表3に示す。寺嶋ゼミナールでは、前半は、前期から続く神奈川経済同友会主催の「産学チャレンジプログラム」の最終的な発表準備作業を行う。その後、第5回目から、余暇ツーリズム学会における発表準備にとりかかる。前期に学んだ、マーケティングリサーチの定量的かつ定性的分析手法を用いて、自ら決めた発表テーマの分析に取り組む。テーマごとに適した分析手法を用いることが望ましいが、①アンケート調査、②インタビュー調査、③テキストマイニング、等の手法を用いることが多い。これら手法を復習しながら、実際に学会発表のために、分析手順やその可能性、限界等を身に付けていく。

分析対象とする2つのゼミナールの状況を補足すると、どちらのゼミナールも3年次の春学期から開

講され、半年間の人間関係構築期間を有している。

4. 調査概要

4-1. 調査の設計

本研究では、学生自身による2回の自己評価を通じて、学会の学生教育研究部会における発表までの一連の取り組みにおけるゼミナール教育の効果を明らかにする。1月に行われる学会部会における発表の前後にアンケート調査を行い、学生自身がどのような力をつけたいと考えていたか、また実際にどのような経験を得られたかの分析を通じて、学外における発表という緊張経験の機会がどのような教育を得意とするかを検討する。

学会部会における発表前調査のアンケート項目を表4に示す。発表前調査では、自身の社会人基礎力9項目の現状について5段階のリッカート尺度で答えるほか、自身の強みと弱み、この取り組みによって身に付けたい力、取り組みに期待することについて自由回答を求めている。

続いて、学会における発表後のアンケート項目を表5に示す。学会発表を中心とした活動を通じて社会人基礎力がどのように変化したか、9項目について3段階のリッカート尺度で問うほか、力がついた項目および学会発表を通じて身についた力、学会発表を通じて考えたことについて自由回答を求めた。

表4 学会発表前の調査項目と回答方法

項目	回答方法
氏名	自由回答
所属ゼミナール	選択肢から単一回答 ・ 神奈川大学寺嶋ゼミナール ・ 文教大学白土ゼミナール
自身の社会人基礎力の現状	リッカート尺度（1：全く力がない— 5：非常に力がある） ・ 主体性 ・ 働きかけ力 ・ 実行力 ・ 課題発見力 ・ 計画力 ・ 創造力 ・ 発信力 ・ 傾聴力 ・ 柔軟性 ・ 状況把握力 ・ 規律性 ・ ストレスコントロール力
あなた自身の強み	自由回答
あなた自身の弱み	自由回答
この取り組みによって身につけたい力	自由回答
その他、取り組みに期待すること	自由回答

表5 学会発表後の調査項目と回答方法

項目	回答方法
氏名	自由回答
所属ゼミナール	選択肢から単一回答 ・ 神奈川大学寺嶋ゼミナール ・ 文教大学白土ゼミナール
学会発表を中心としたゼミナール活動による社会人基礎力の変化	リッカート尺度 (1: 変わらない— 3: とても力がついた) ・ 主体性 ・ 働きかけ力 ・ 実行力 ・ 課題発見力 ・ 計画力 ・ 創造力 ・ 発信力 ・ 傾聴力 ・ 柔軟性 ・ 状況把握力 ・ 規律性 ・ ストレスコントロール力
上記の設問で「とても力がついた」と回答した社会人基礎力について	自由回答
今回の学会発表を通じて身についた、普段の授業では得ることが難しい力	自由回答
その他, 学会発表について考えたこと	自由回答

4-2. 調査の実施

アンケート調査は学会発表の事前事後、計2回実施した。調査期間と回答者数を以下に示す。事前調査への回答者数は32名、事後調査への回答数は24名であった。事後調査への回答者24名のうち事前調査に回答していなかった1名を除いて、事前事後の両調査に回答した23名を分析対象とした(表6)。

事前調査

- ・ 期間：2024年11月15日から2024年11月20日
- ・ 回答者数：32名

事後調査

- ・ 期間：2025年1月11日から2025年1月15日
- ・ 回答者数：24名

表6 学会発表後の調査項目と回答方法

所属	有効回答者数
白土ゼミナール (文教大学情報学部)	10
寺嶋ゼミナール (神奈川大学経済学部)	13
合計	23

アンケート調査の実施においては、回答は任意であり成績評価には関連がないこと、調査結果はデータの匿名化を経て分野横断型研究推進事業研究プロジェクトによって報告される予定である旨を説明している。

5. 分析結果

5-1. 取り組み前の自己分析

まず、学会発表前における社会人基礎力の状況について、自己分析全体の傾向を表7に示す。社会人基礎力の9項目について、非常に力があると自己評価する場合を5、全く力がない場合を1とするリッカート尺度で調査を行った。標準偏差はどの項目も概ね1前後であり、大幅にばらつきのある項目は見られなかった。

各項目の平均値を見ると、規律性が3.96、傾聴力が3.87、状況把握力が3.70と高い傾向にあることがわかる。一方、自己分析の評価が低い項目は、発信力が2.43、計画力が3.04、働きかけ力が3.09となっている。

規律性や傾聴力、状況把握力といった力に対する自己評価の高さについては、周囲の和を乱すことなく、常にコミュニケーションをとりながら状況を把握する様子が想起される。このような力に対して自己評価が高いことから、PBLをはじめとする授業内のグループワークや、あるいは授業外での諸活動における協働といった機会が各々の成長を促してきた可能性が示唆される。

一方、発信力や計画力、働きかけ力といった項目の自己評価の低さからは、これまで学生生活を中心とする様々な活動において、あまりそのような力を育む機会に恵まれなかったことが想像される。計画力が必要となるような長期間の活動や、発信力や働きかけ力が求められる対外的活動は、半年間、教室内での実施として設計される授業を通じて育むことは難しいのかもしれない。

表7 学会発表前の社会人基礎力（平均）

社会人基礎力	平均	標準偏差
主体性	3.13	0.99
働きかけ力	3.09	1.18
実行力	3.35	0.87
課題発見力	3.13	0.95
計画力	3.04	1.20
創造力	3.13	1.23
発信力	2.43	0.92
傾聴力	3.87	0.99
柔軟性	3.13	1.08
状況把握力	3.70	0.95
規律性	3.96	0.81
ストレスコントロール力	3.26	1.42

続いて、学会発表前の自身の強みと弱み、および学会発表までの取り組みを通じて身につけたい力について、任意の社会人基礎力の項目を挙げた上で自由回答を求めた。図1に、該当する社会人基礎力の

学会発表前の強みと弱み、身につけたい力（人数）

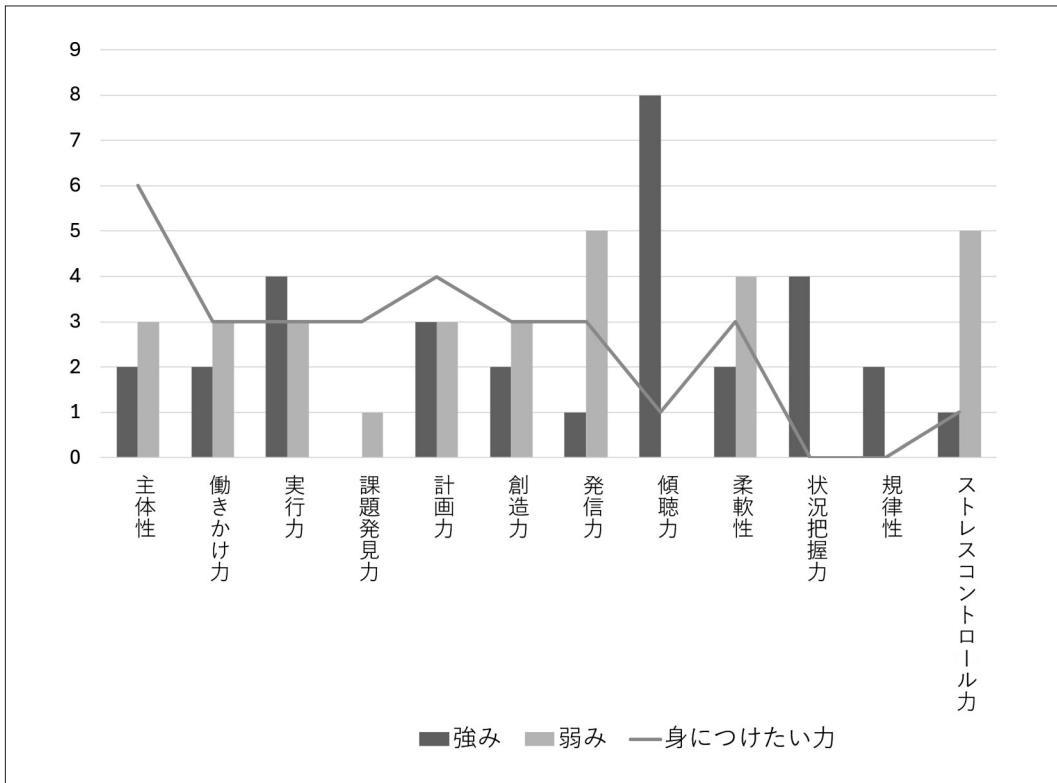


図1 学会発表前の強みと弱み、身につけたい力

グラフを示す。

自身の強みとして最も多く挙げられているのは傾聴力、次いで状況把握力であり、表6で示した全体傾向と概ね同様の、皆と共に取り組む力に対する自己評価の高さが窺える結果となった。「私が社会人基礎力の中で強みだと感じる点は、傾聴力です。普段から人の話を聞くことがわりと得意で、相談役にもなることが多いからです。相手の話にじっくり耳を傾けることを大切にしています。話し手の気持ちや考えを受け止め、共感しながら会話を進めることが信得意です。また、相手の立場に立って考えることを心掛けています。」といった、普段から傾聴力を自身の強みとして自覚する回答も見受けられた。一方で、実行力を強みとして挙げた学生が4名おり、少数ではあるが実行力を強みと捉えている学生の存在が浮き彫りとなった。

一方、自身の弱みとして最も多く挙げられていたのは、全体の平均値が低かった発信力に加え、ストレスコントロール力や柔軟性である。顕著な例として、「社会人基礎力の中で自分の弱みはストレスコントロール力だと思います。普段の生活の中でレポートが溜まっていたりアルバイトや就職活動で予定が埋まっていたりすると、自分でストレスを解消することが出来ず疲れが出てしまうことがよくあるからです。ストレスが溜まった時は基本的に好きな音楽を聴いたり、映画を観たりしてリラックスすることを心掛けていますがなかなかコントロールすることができません。」のように、生活全体のバランスにおいてストレスコントロールが求められていることに自覚的な一方、その対処が難しいという考えが窺えた。半年間を一区切りとして教室内で展開される一般的な形態の授業の中では、発信力やストレスコントロール力を養う機会に乏しいことから、弱みとして挙げられているのではないだろうか。

学会発表を通じた社会人基礎力の変化（平均値）

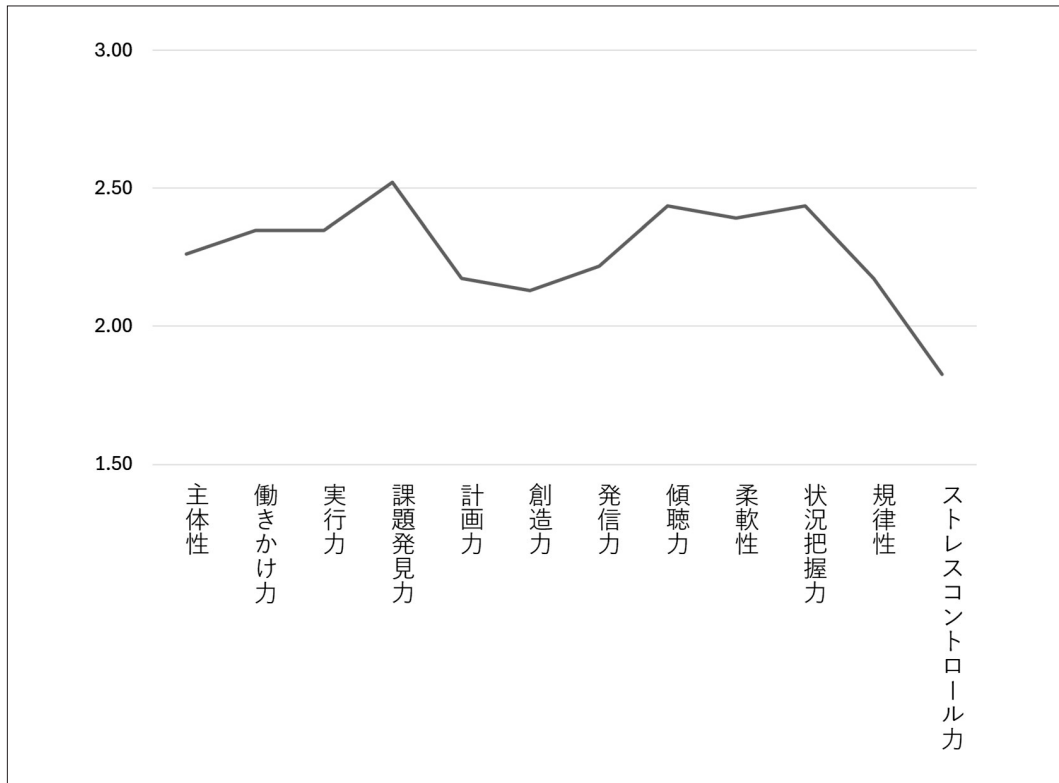


図2 学会発表を通じた社会人基礎力の変化

身につけたい力にはばらつきがあるが、「主体性や発信力の力をつけたいと思います。自身の弱みでも述べたように、人の意見に流されやすく自分の意思で行動できていないため、この取り組みを通して、自分の意見をしっかりと発言し、物事を自分で決断できるようになりたいと思います。また、自分の思っていることをわかりやすく正しく相手に伝えることが下手なので、伝えたい情報を整理し、わかりやすく伝えられるように努力しようと思います。」という回答に象徴される通り、23名中15名にあたる65%が弱みとしてあげている力を身につけたい、すなわち弱みを克服したいと考えている。興味深いのは、身につけたい力として最も多く挙げられた主体性である。今回の学会発表に向けた活動では、グループで研究デザインから学会発表までの全てに対して積極的な参画が求められており、その意味において通常の授業とは異なった主体性が必要となる。このように機会の特徴を理解した上で主体性を身につけたいと捉えている学生が多いことは、すなわちゼミナールにおける学会発表までの取り組みの個性が適切に捉えられていると考えられよう。

5-2. 取り組み後の自己分析

続いて、学会発表後の社会人基礎力の自己分析結果を見ていこう。学会発表に向けたゼミナール活動を通じて自身の社会人基礎力がどのように変化したか、とても力がついた場合を3、変わらない場合を1とするリッカート尺度で調査を行った結果を図2に示す。

全体の平均値から、最も力がついたと認識されたのは課題発見力であった。課題発見力は、発表前の調査における自己分析ではあまり言及が多くなかった項目であるものの、多くの学生が向上したと自己

学会発表前に身につけたいと考えた力と発表を通じて身についた力（人数）

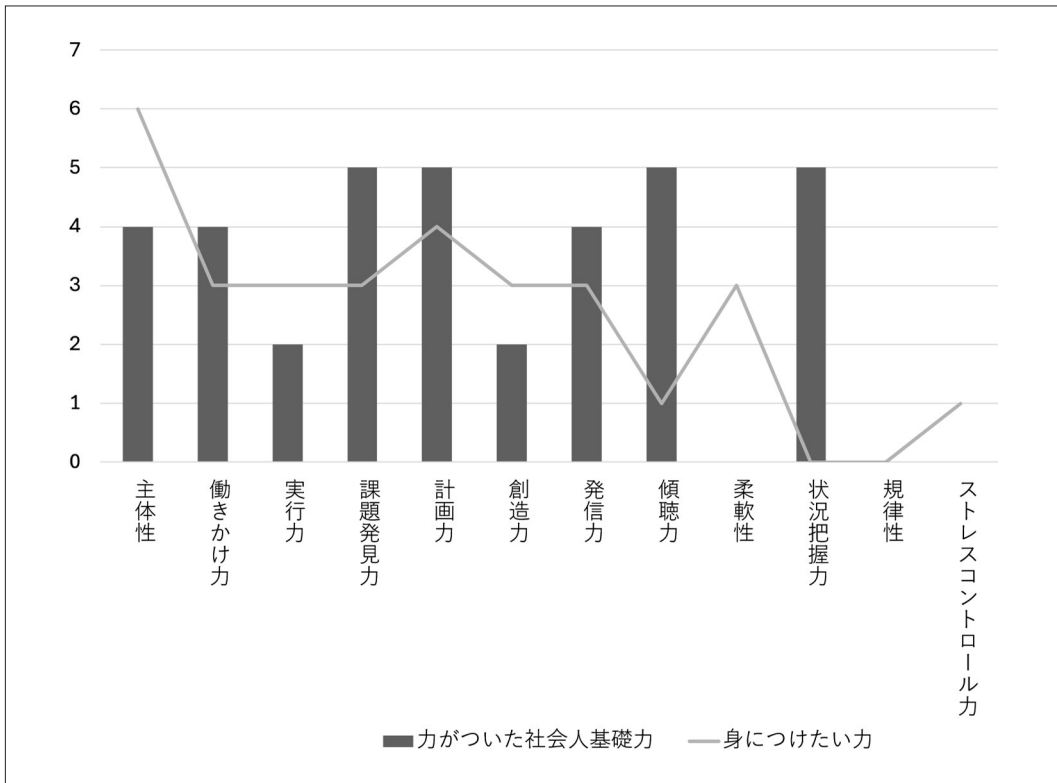


図3 学会発表前に身につけたいと考えた力と発表を通じて身についた力

分析した結果となった。「課題発見力や状況把握力が身についたと思います。限られた時間での準備だったが、現状の課題を理解してどのように進めていくのか考えられました。」「課題発見力、創造力、発信力が身につけられたと思う。研究を始めるにあたって、企業の課題解決の鍵を握るのは企業がどのような課題を抱えているのかを見つけ出すことであり、課題発見力を身につけられた。また、学生からの視点を意識し創造力を身につけられた。そして、半年間かけて行った研究結果をプレゼン練習を重ねたことで発信力も身につけることができた。」という回答からもわかるように、学会発表を目指すグループ研究という取り組みの特性が影響していると考えられる。

傾聴力、柔軟性および状況把握力も力がついたと認識されている。傾聴力および状況把握力については、発表前の調査の時点で高い自己評価を得ていた項目であり、もともと高い水準にあると認識していた力が活動を通じてさらに伸びたという認識であると言えよう。例えば、「話し合いを進める上で、今何ができていないのか、やるべき事は何かと状況把握の力を話し合いを進める毎につけることが出来ました。また、一人一人の意見に耳を傾け意見を抜粋してまとめる傾聴力と働きかけ力がついたと感じています。」という回答からもわかる。柔軟性については、研究活動という、時にシラバス通りには事が運ばない取り組みの特性が良い影響を及ぼしたのではないだろうか。

ストレスコントロール力は、他の項目に比べ変化がなかったと捉えられた傾向にある。学会発表に向けた取り組みの中にはストレスをコントロールすべき機会が多くなかった可能性も考えられる。

さらに、発表前の調査で身につけたいと考えた力、および発表後の調査で身についたと回答した力の集計を図3に示す。なお、身につけたい力と身についた力が一致していた割合、すなわち身につけたい

がとても興味深かった。』といった、普段の授業では得られない、異なる分野の発表を聞くことができたという異分野の研究に触れる機会への言及が見て取れる。

このように、学会発表を目指した一連の取り組みは、研究発表という緊張経験の機会、そして発表に向けた継続的な協力、さらに大学間連携を通じて異分野の学生同士が刺激し合う機会をもたらしていると言えるだろう。

6. 考察と展望

本研究では、社会人基礎力の視点からゼミナール教育の効果について考察した。学会発表事前事後の2回にわたる自己分析アンケートを通じて、学会発表を目標に定めたゼミナールという場が得意とする実学教育の方向性、および学会発表という大学間の連携を通じた学際的な学生同士の相互刺激の価値を検討した。

学会発表前後の自己評価アンケートから、以下の内容が確認できた。まず、発表前のアンケートからは、学会発表への取り組み前の段階で、既に規律性や傾聴力、状況把握力といった周囲とコミュニケーションし協調する力に対して自己評価が高いことが示された。文部科学省（2012）にて提唱されたアクティブ・ラーニングをはじめとするグループ学習の機会が浸透し、諸活動における協働の経験が学生の成長を促してきたと考えられる。一方、発信力や働きかけ力といった対外的活動の力、計画力といった長期間を視野に入れた活動の力に対しては自己評価が低く、一般的な教室内での実施として設計される授業で育むことが難しい類の力があることも示唆された。

学会発表を通じて、最も力がついたと認識されたのは課題発見力であった。研究活動という取り組みが本質的に求める力のひとつである課題発見力がついたと捉えられたことは、答えのない課題にどのように取り組むべきかという研究あるいは社会問題解決のための姿勢を身につけられたとも考えられる。

傾聴力や状況把握力といった、学会発表前に自己評価が高かった力のさらなる向上も認められた一方で、ストレスコントロール力のように変化を認められなかった力もある。いずれにしても、事前に身につけたいと考えていた力と、実際に身についたと捉えた力が一致していた割合は高くなかった。しかし、課題発見力や計画力といった研究活動のプロセスを通じて身につく、活動の特性に応じた力の向上が見受けられた。

普段の授業では得ることが難しい力については、資料作りから発表までの研究発表の力や、異分野の専門性に対する新たな視点などが言及された。

以上のことから、まず、学会発表を目指す取り組みの前提として、学生の多くは傾聴力や状況把握力といった周囲とコミュニケーションし強調する力を持っていると認識している状況にあった。このようなグループ活動にある程度の自信を持っている状況を起点として学会発表に向けた活動を行ったことが、グループ各々が研究発表への活動を遂行できた一因となったと推測される。

このような前提の上で、学会発表を目指す一連の研究活動の経験は、第一に課題発見力の向上に繋がった。加えて、グループ活動を通じて協働の力もより高まったと捉えられた。さらに、他大学および異分野の学生との議論という大学間連携からは、普段の授業からは得難い新たな視点を獲得することができた。

注目すべき点として、特定の社会人基礎力習得の方向性を意識していても、結果的には当初の目標とは異なる力が得られたという点である。グループ研究のように予め答えが用意されていない学修の機会には、特定の能力を伸ばすというより、紆余曲折しつつ結果的に様々な力が向上するというセレンディピティが存在する。特定の能力を伸ばすことに固執するのではなく、あくまで社会人基礎力の項目は提示に留め、活動の特性を活かしつつ成長の機会を活用することが重要なのではないだろうか。

今後の展望として、ゼミナールという実学教育における教育効果のさらなる体系化が目指される。本

稿では、学際性を持つ対外的な場における研究発表という緊張機会を目標に取り組む事例を取り上げたが、ゼミナールではそれぞれの専門性に依りて様々な目標が設定される。ゼミナールのように、長期間の人間関係構築期間を有する学びの場において、実学教育が得意とする方向性を体系的に整理することで、実学教育研究の蓄積に貢献したい。

本研究は、神奈川県大学における2024～2026年度分野横断型研究推進事業である「『実学教育』の実質化による教育的価値創造の原理の構築：具体と抽象とのインタラクティブアプローチ」の議論等をもとに整理したものである。寺嶋正尚・白土由佳は、同プロジェクトのメンバーである。

注

- (1) 実学及び実学教育に関する研究は、寺嶋・白土・齊藤（2025）に整理した。
- (2) 神奈川県大学ホームページ (<https://www.kanagawa-u.ac.jp/education/seminar/>)。2025年11月11日閲覧。
- (3) 『広辞苑第6版』新村出編，岩波書店，2008年。
- (4) 経済産業省ホームページ (<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>)。2025年11月11日閲覧。
- (5) 観光経済新聞「余暇ツーリズム学会のインターゼミナールに7大学から146人の学生が参加 早大で11月11日実施」<https://www.kankokeizai.com/> 余暇ツーリズム学会のインターゼミナールに7大学/2025年11月11日閲覧。

引用・参考文献

- 青木康太郎・粥川道子・杉岡品子（2012）「キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究」北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要3, pp. 27-39。
- 一ノ宮士郎（2016）「アクティブラーニングに関する一考察：一ノ宮ゼミナールにおける実践」専修経営学論集101, pp. 1-23。
- 井上芳保（2004）「大学教育における「学び」の基本を培うために：基礎ゼミナールの担当教員としての経験を中心に」社会情報13（2）, pp. 125-138。
- 経済産業省（2010）「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査」<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3518969/www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shakaijinkan.pdf>（2025年11月11日閲覧）。
- 小磯重隆（2012）「社会人基礎力と就業力の育成」21世紀教育フォーラム7, pp. 29-36。
- 小林勝法・野村美穂子・横川潤（2002）「基礎ゼミナールの目的と実際」文教大学国際学部紀要12（2）, pp. 99-115。
- 後藤靖宏・広瀬健一郎・大谷直史・青木一真・加藤克（1999）「大学教育におけるゼミナールのあり方と指導者の役割：1998年度社会情報学基礎ゼミナール指導の報告と今後への提言」社会情報8（2）, pp. 1-26。
- 近藤真唯・高野昭雄・相良陽一郎・中村晃（2014）「社会人基礎力をつける教育に関する研究」千葉商大紀要52（1）, pp. 189-199。
- 斎藤英明・田部田晋・篠原史成（2023）「専門基礎ゼミナールにおける主体的な学びの変化」北陸大学紀要（55）, pp. 81-89。
- 篠原史成・斎藤英明・田部田晋（2023）「2023年度前期1年次ゼミナールを通じた学習態度の変容観察」北陸大学紀要（55）, pp. 147-154。
- 清水和秋・三保紀裕（2013）「大学での学び・正課外活動と「社会人基礎力」との関連性」関西大学社会学部紀要44（2）, pp. 53-73。
- 寺嶋正尚・白土由佳・齊藤ゆか（2025）「実学に関する学術研究の変遷～1980年代以降の研究に関するテキスト分析を中心に～」人文学研究所報73, pp. 87-99。
- 西野毅朗（2016）「日本のゼミナール教育の発展過程と構造に関する研究」同志社大学博士学位請求論文，甲第806号。
- 橋本智也（2024）「初年次教育科目「初年次ゼミナール」の目的と到達目標の達成状況を検証する：2022年度受講者アンケートの結果から」大阪公立大学大学教育2, pp. 32-41。

- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版。
- 伏木田稚子・北村智・山内祐平（2011）「学部3，4年生を対象としたゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係」日本教育工学会論文誌 35（3），pp. 157-168。
- 伏木田稚子・北村智・山内祐平（2012）「テキストマイニングによる学部ゼミナールの魅力・不満の検討」日本教育工学会論文誌 36（Suppl.），pp. 165-168。
- 伏木田稚子・北村智・山内祐平（2014）「学部ゼミナールの授業構成が学生の汎用的技能の成長実感に与える影響」日本教育工学会論文誌 37（4），pp. 419-433。
- 松尾哲也（2015）「インターンシップの意義と「社会人基礎力」」総合政策論叢 30，pp. 49-63。
- 向居暁（2012）「大学のゼミナール活動における批判的思考の育成の試み」日本教育工学会論文誌 36（Suppl.），pp. 113-116。
- 森本祥一（2024）「経営学教育におけるアクティブラーニングの実践報告：専修大学での14年間のゼミナール教育を振り返って」専修経営学論集 117，pp. 27-50。
- 文部科学省（2012）（中央教育審議会）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
（2025年11月11日閲覧）。

A Study on the Effectiveness of Seminar Education Using Indicators of Essential Competencies

SHIRATSUCHI Yuka, TERASHIMA Masanao

Abstract

This paper examines the effectiveness of seminar education from the perspective of foundational skills for working adults. A self-analysis questionnaire was administered twice to students participating in group research activities aimed at external presentations within third-year undergraduate seminars. The survey revealed that opportunities for medium-term group research and interdisciplinary external presentations enhance problem-identification skills and collaborative abilities while providing new perspectives difficult to gain through regular classes. Furthermore, it suggests the importance of viewing practical education settings, like group research—where answers are not predetermined—as opportunities for growth premised on serendipity, which ultimately enhance various abilities.